アントニオ　劍を收めて下さい。この若い方が問違をせられたのでしたら、私が代つてその咎めを受けます。あなたがたが不法をしむけるのであれば、私がお對手になります。〔拔劍しながら。

サア、トウビー　手前が？　手前は一體何者だ？

アントニオ　この方を思へば、今聞かれた高言位は物かは、ずゐぶん思ひ切つたことでもしようといふ者です。

サア、トウビー　要らざるおせつかいをしようといふのなら、己が對手にならう。〔拔劍する。

フェイビアン　ああ、これ、サア、トウビー。警吏がまゐりますよ。

サア、トウビー　やがて、見參するぞ。

ヴァイオラ　あなた、どうか劍を收めて下さいまし。

サア、アンドルー　はいはい、さう致しませう。それからお約束したことはきつと守ります。あの馬はおとなしくあなたをお乘せして手綱のままに動きますでせう。

二人の警吏登場。

第一の警吏　これがその男だ。取押へろ。

第二の警吏　アントニオ、オーシーノウ伯の御用だ。

アントニオ　人違ひですよ。

第一の警吏　いや、少しも人違ひではない。現在、海員の帽を戴いてゐられないけれども、貴君のお顏はよく存じて居る。この方を連行しろ。私がよく知つてゐることは御承知だ。

アントニオ　仰せに從はなければなりますまい。〔ヴァイオラに〕あなたを探し

歩いたのでこんなことになりました。が、どうも致方がありません。何とか始末をつけることに致しませう。如何でせう、この窮境に際して私の財布を返していただきたいのですが。私としては自分の身に降りかかつた事よりも、あなたの爲にもつと盡してあげることの出來ないのが遺憾です。茫然としてゐられますが、なあに、大丈夫ですよ。

第二の警吏　さあ、お出でなさい。

アントニオ　私はあの金をいくらか返していただかなければなりません。

ヴァイオラ　どの金のことを仰有るのですか。ここで御親切にとりはからつて下さいましたことに對し、又二つには現在の御難をお氣の毒に存じますから、私の貧弱な資力の中から何ほどかのものをお借し致しませう。持つてゐるのは大したものではありません。有金をお分け致しませう。お受けとり下さい、これが財嚢の半分です。

アントニオ　この期に及んで私を知らぬと言はれるのか。あなたに對して致した志を今更とやかくと申上げなければお分りにならないなどといふことがありますか。私の悲境につけ込んで下さるな、でないと、こちらの致した親切を盾にとつてあなたを咎めるといふやうな不德な男にならないものでもありませんから。

ヴァイオラ　私は何も存じません。お聲にもお顏にも覺がありません。男として恩知らずであるのは嘘八百の空威張や口數の多い亂醉や、或は私どもの弱い血に宿る强い腐敗のどのやうな汚點にも增して嫌ふべきことであると思ひます。

アントニオ　ああ、驚き入つたものだ！

第二の警吏　さあ、どうです。御同道致しませう。

アントニオ　少少物を言はせていただきたい。私はここに御覽になるこの青年

が死の顎に半分呑まれてゐるところを救ひ出してやつたのです、又その極めて尊敬すべき徳を秘めてゐると思はれた姿に私は全心を打ち込んだのです。

第一の警吏　そんなことがわれわれに何の關係があります？　時が移ります。さあ、行きませう。

アントニオ　だが、ああ！　この神のやうな男は何といふ怪しからん偶像になつたことであらう。セバスティアン、貴様は端麗な容姿を汚した。自然には人の心の外に瑕はない。情が無いのでなければ醜いものはない。徳は美だ、が、美しい悪徳は悪魔が飾り立てた、中身のない箪笥だ。〔註。この場合の「箪笥」trunks、は木彫などを立派に装飾した箱で、當時は重大な家具の一つであつた。〕

第一の警吏　この男は氣が狂つて來た。早く連れて行け！　さあ、あなた、行きませう。

アントニオ　お伴致します。

〔警吏たちアントニオと共に退場。

ヴァイオラ　あんなに向きになつて言ひ放つところを見ると、自分を信じてゐるやうだ。が、私にはああいふ風に自分が信ぜられない。嬉しいお兄さん、私があなたに取違へられたのだといふ、この想像がどうか本當でありますやうに、ああ！　どうか本當でありますやうに。

サア、トウビー　ここへ來い、フェイビアン。深慮遠謀の格言を一、二節、そつと口吟むのだ。

ヴァイオラ　セバスティアンと言つてゐた。兄さんがこの私の鏡〔註。「私の持つてゐる鏡」といふ意味と「私といふ鏡」といふ意味を二重に利かしたもの。〕の中にまだ生きてゐられるといふことは分つてゐる。兄さんのお顔はそつくりそこに寫つてゐる通りだつた。それにいつもかういふ仕立の着物と色合と飾を身につけてゐられた、私はお兄さんの眞似をしてゐるのだもの。ああ、これが本當になるなら、暴風も親切だ、潮の波も情に滿ちたものだ。

〔退場。

サア、トウビー　とても恥知らずで、生意氣な小僧で、おまけに兎よりも臆病な奴だ。恥知らずだといふことは友の危急を顧みず、知らない顔をしてゐることを見てもわかる。臆病なことはフェイビアンに尋いて見ろ。

フェイビアン　臆病者だ、臆病の凝り固まりだ、そいつにかけては魂を打ち込んだ奴だ。

サア、アンドルー　畜生、追かけて行つて毆りつけてやる。

サア、トウビー　やつつけろ。うんと撲り飛ばしてやるがいい、決して劍を拔くのぢやないぞ。

サア、アンドルー　やつつけいでか、でなけりや――　〔退場。

フェイビアン　さあ、この結果を見に行きませう。

サア、トウビー　請合つて置くが、これぢやまだ何事も起らないよ。　〔退場。

第四幕

第一場　オリヴィアの館の前の街。

セバスティアンと道化登場。

道化　どうあつてもお迎へに來たのではないといふことを承知させようとなさるのですね？

セバスティアン　おい、おい、いい加減にしないか、つまらないことを言ふ奴だ。

道化　うまく仰有いますことだよ！　なるほどね、私はあなたにお近付がないんです。お館さまから話をしに來てくれと申上げる爲に送られた者でもない

んです。あなたのお名はシザリオさんとおつしやるのでもないんで、はい、これは私の鼻でもないんです。さうであるものは何でもかんでもさうでないんです。

セバスティアン　お願だから妄言は餘所で吐いてくれ。お前には近付がないよ。

道化　妄言を吐けだつて！　何處かのお偉い方が仰有ることを聞かれたのですね、で、今度はそれを道化に對つてお使ひになるわけだ。妄言を吐けだと！この分ぢや圖體の大きなのらくら息子もやがて世の中といふ氣障な小僧になるだらう。〔註。氣障と氣どりが世界に滿ち溢れるだらう、との意。〕とにかくお願でございますから、知らないふりはその位にして私の主人に何と吐いたらよろしいか、お教へを願ひたいもので。やがてお出でになると吐きませうか。

セバスティアン　くだらない野幇間さん、どうかあちらへ行つてくれないか。さあ、これは志だ。この上ぐづぐづしてゐるともつとひどいお駄賃をやるぞ。

道化　手切れは御立派なものですな。道化に金を下さるやうな聰明な方は地價十四年の値うち〔註。當時一般の地價は十二年分の値うち——即ち、一年の地代の十二年分の値うちであつた。ここではそれを更に大きなものにして言つたのである。〕にも當る程のいい評判を立てて貰へますよ。

サア、アンドルー登場。

サア、アンドルー　やあ、もう一度見參したか。これでも喰へ。〔セバスティアンを打つ。〕

セバスティアン　何と。ぢや、斯うだ、斯うだ、斯うだ。どいつもこいつも氣が狂ひをつたか。〔サア、アンドルーを毆る。〕

サア、トウビーとフェイビアン登場。

サア、トウビー　お止めなさい、でないと、その短刀を家のむかうに投り棄てますぞ。

道化　こちらは早速御注進だ。二ペンス〔註。「いくら」といふのと同じ意。〕くれたつてこの手合の巻添を食つちやゐられない。〔退場。

サア、アンドルー　いや、そのままにしておけ。己はもう一つの策略でこいつを取拉しいでくれる。イリリアに法律といふものがあるなら毆打との訴訟を起すつもりだ。最初に毆つたのは己だが、そんなことはどうでもいい。

セバスティアン　手を放して下さい。

サア、トウビー　まあ、まあ、君、こちらは放さないよ。まあ、まあ、お若い戰士、その刃を納ひたまへ。あんたは血に狂つてゐるのだ。まあさ、控へたまへ。

セバスティアン　こちらは構つて貰ひたくないのだ。一體どうしようといふのか。これ以上、怒らせたいといふのなら、劍を拔け。

サア、トウビー　何だと、何だと！　いや、その儀ならば手前から一オンスか二オンス、その生意氣な血を貰ふことにしよう。〔劍を拔く。

オリヴィア登場。

オリヴィア　お止め、トウビー！　聽かないと承知しないよ、お止めといふのに！

サア、トウビー　マダム！

オリヴィア　いつまで經つても斯うなのかい。仕様のない恥知らず！　禮儀な

んてものが教へられたことのない、山と野蠻な洞穴が性に合つてるわ。

目通りはかなひません！

怒つてはいけませんよ、シザリオ。

亂暴者、さつさと出ておいで！

〔サア、トウビー、サア、アンドルー及びフェイビアン退場。

もし、あなた、この失禮な無法な仕向けにはさぞお腹立ちでせうが、智慧の深いお心にすがつておゆるしを願ひます。さあ、館へお供致しませう、あすこで、今までにもどんなに澤山の無益な大騒動をあの暴れ者が不器用にたくらんだかといふやうなお話をすれば、今度のことも笑つてお濟しになれませう。何としても來ていただかなければなりませんよ。否と仰有つてはいけません。ほんたうに仕様のない人つたらありやしない、あなたの心臓につつかつて行つたので、可哀想に、私の心臓がひつくり返つたのよ。

セバスティアン　こりや何と考へたものであらう？　川はどう流れてゐるのだ？己は氣が觸れてゐるのか、でなけれや、これは夢だ。想像が己の分別をいつまでもリーシー〔註。冥府にあると傳へられる河で、その水を飲むものは一切を忘れる。〕の水に浸してくれますやうに！

オリヴィア　さあ、行きませうよ。私の言ふことを聽いて下さるといいのだけれど。

セバスティアン　マダム、仰せに從ひますよ。

オリヴィア　おや！　さう仰有るの、では、さうなさいね。〔退場。

第二場　オリヴィアの館の中の一室。

マライアと道化登場。

マライア　いえ、お願だからこの法衣と髯を附けて頂戴。お前さんが牧師補のサア、トウバスだと思ひ込ませるのよ。早くなさいね。その間にサア、トウビーを呼んで來るわ。〔註。サア、トウバス (Sir Topas) のサア (Sir) は 'dominus' 即ち B・A・に當る學者の尊稱で士爵に關係はない。'Sir Topas' の名はチョーサアの 'Rime of Sir Thopas' から出たものであらう。トウパッ (topaz) 即ち黄玉は狂氣を醫す功力をもつてゐたと傳へられる。〕

〔退場。

道化　ぢや、こいつを着るとしよう、これで變裝するとしよう。斯ういふ法衣を着て變裝した最初の者だといいのだがなあ。己はこの役目にぴつたりと合ふには丈が足りないし、立派な學者と思はれるには痩せ方が足りない。でも、眞直な男で、いい世帶持ちだと言はれるのは、學問に痩せた男、大學者と言はれるのと大差なき讃辭だ。仲間がやつて來た。

サア、トウビー・ベルチとマライア登場。

サア、トウビー　御機嫌よう、牧師さん。

道化　Bonos dies, 〔註。「今日は。」但し、スペイン語とラテン語をごつちやにしてゐる。〕サア、トウビー。と申すのはです、ペンとインキを見たこともないブラーグの老いたる世捨人がゴルボダック王の姪御にいしくも申しましたやうに、「在る所のものは在る」でございましてな。されば、吾輩、牧師さんであるが故に、牧師さんである。と、申すのはです、「所のもの」は「所のもの」、「ある」は「ある」であるに過ぎないではありませんか。

サア、トウビー　彼奴へ願ひますよ、サア、トウバス。

道化　おーい！　聞えたかの。この座敷牢の中へ物申す。

サア、トウビー　なかなか行りをるわい。こいつうまいぞ。

十二夜

マルヴォリオ　〔中で〕呼んでゐるのは誰だ？

道化　牧師補のサア、トウバス、狂人マルヴォリオを訪れてまゐつた。

マルヴォリオ　サア、トウバス、サア、トウバス、ねえ、サア、トウバス、お館さまのところへ行つて下さいな。

道化　退れ、大袈裟な惡魔の奴め！　この男を惱ましをることはどうだ！　御婦人たちのことの外は言はないのか。

サア、トウビー　牧師さん、上出來だ。

マルヴォリオ　サア、トウバス、こんなに酷い目に遭つた者はありませんよ。ねえ、サア、トウバス、私が氣狂だなんて思はないで下さいよ。奴等私をこの恐ろしい暗闇の中へ押込んだのですよ。

道化　默れ、不埒千萬なセイタンの奴め！　己はこれでもよほど加減して呼びかけてゐるのだぞ。惡魔にさへ禮を盡すといふ程の士君子の一人だからな。

牢の中が暗いと言ふのか。

マルヴォリオ　地獄見たいに、暗いよ、サア、トウバス。

道化　なあに、防塞のやうに透明な出窓があり、南北に當つて黑檀のやつやとした高窓があるよ。それでも障碍〔註。傷害。裁判に意味を持たせたのである。〕だと言ふのか。

マルヴォリオ　私や氣狂ぢやないよ、サア、トウバス。ほんたうにこの牢は暗いよ。

道化　狂人よ、汝はあやまてり。蒙昧の外に闇はないと言ふのだ。汝はその蒙昧の闇に迷へること濃霧に迷へるエジプトびとの如し。

マルヴォリオ　私は斷言します、蒙昧が地獄のやうに暗くても、この牢は蒙昧のやうに暗いのです。又、こんなに醜い目に遭つたものはないといふことを斷言します。私はあなたと同じやうに氣狂でも何でもないのです。何か筋の通

つた論で以て試していただきませう。

道化　野鳥に關するバイサゴラスの說は何であつたかな。

マルヴォリオ　私どもの祖母の魂が鳥に宿つてゐるかも知れないといふのでせう。

道化　彼の說をどう思ふか。

マルヴォリオ　私は魂を尊敬してゐますから、彼の說なんか一向感服致しません。

道化　機嫌よくしろよ、蒙昧の中に留まつてゐるがよいぞ。己がお前の正氣を認める前に、お前はバイサゴラスの說を守り、お祖母さんの魂を拂ひ落してはならないといふので、山鶺鴒〔註。莫迦の異名。〕を殺す氣にもなれなくなる。さやうなら。

マルヴォリオ　サア、トウバス！　サア、トウバス！

サア、トウビー　飛切上等のサア、トウバス！

道化　どんなもんです、私に出來ないことはありませんよ。

マライア　髯と法衣を附けなくたつて、これは出來たのだわね。あの人には見えないのだから。

サア、トウビー　今度は本音でやつて見てくれ、それからどんな樣子になるか知らせてくれ。この惡ふざけからうまく脫け出したいものだ。己は今姪の奴の御機嫌を損ねてゐるのでね、この茶番狂言を大詰まで持つて行くにはこちらの身が危いといふわけだ。後で己の部屋へ來てくれ。

〔サア、トウビーとマライア退場。

道化　〔歌ひながら〕

「これさ、ロビンよ、ひようげたロビンよ、樣はどうした、姫さまは。」

マルヴォリオ　阿呆！

道化　「樣はまことに情なうござる。」

マルヴォリオ　阿呆！

道化「おやおや、それは何ゆゑに？」

マルヴォリオ　阿呆と言ふのに。

道化「あだし男を見染められ。」

誰だい、己を呼ぶのは？

マルヴォリオ　これ阿呆、お前はいつも己の用事をしてくれるのだから、蠟燭とペンとインキと紙を持つて來てくれないか。紳士の體面に誓つて必ずそれ相當の禮をするぞ。

道化　マルヴォリオさんでしたか。

マルヴォリオ　さうだよ、阿呆。

道化　やれやれ、どうしてまたあなたは五官の正氣を失はれたのです。

マルヴォリオ　阿呆、こんなに酷い目に遭はされた者はありやしないんだよ。己が正氣なことは、阿呆、お前が正氣であるのと同然だよ。

道化　え、同然ですつて？　ぢや、あなたの氣狂は本物だ、あなたの正氣が阿呆以上でないのなら。

マルヴォリオ　あいつらは己を小道具〔註。芝居の小道具。〕扱ひしてこんなところへ投り込みやがつた。暗がりの中へ入れやがつて、牧師なんか送りやがつて、莫迦野郎どもが！　あらん限りの手を盡して遠慮會釋もなく己を氣狂だとぬかしやがる。

道化　氣をつけて物を仰有い。牧師さんはここにゐられますよ。マルヴォリオ、マルヴォリオ、汝の正氣が回復するやうに祈るぞよ！　つとめて寢るがよいぞ。べちやくちや喋舌るのは止めろよ。

マルヴォリオ　サア、トウバス！

道化　これ、お主はあれと言葉を交はしてはならぬ。誰で、私で？　へい。私や言葉なんか交はしや致しません。では、御機嫌よろしう、サア、トウバス。

さらばぢや、アーメン。はい、そりやもう、はい、畏まりました。

マルヴォリオ　阿呆、阿呆、阿呆といふのに！

道化　ああ！　御辛抱なさいまし！　私やお前さんに物を言つたので叱られましたよ。

マルヴォリオ　ねえ、阿呆、あかりと紙を持つて來てくれ。己の正氣は大丈夫、イリリア中の誰にも劣らないのだから。

道化　なあ、それだといいのだけれど、なあ！

マルヴォリオ　この手に誓つて言ふ、己は正氣だ。これ阿呆、インキだ、紙だ、あかりだ。それから己の書き記すことを姫さまに傳へてくれるのだ。これまでに文使でもうけたことのないやうな褒美をとらせるよ。

道化　持つて來てあげませう。でも、本當のことを言つて下さい、あなたは實際氣狂ではないのですかい。それとも、まやかしものですかい。

マルヴォリオ　信じてくれ、氣狂ぢやないんだよ、本當のことを言つてるんだ。

道化　どうもね、腦隨を見ないことには氣狂のいふことなんか信ぜられませんよ。あかりと紙とインキを持つて來てあげませう。

マルヴォリオ　阿呆、思ひ切り御禮をするよ。お願だ、行つてくれ。

道化〔歌ひながら〕

行つてまゐるぞ、
すぐさま行くぞ、
やがて戻るぞ、お手もとに、
ちらと、昔の
小鬼のやうに、
いつも御用に立つやうに。

十二夜

哮り狂つて
木刀ふるひ、
ア、ハ！　と惡魔へ呼びかける、
狂兒よろしく、
爪切れ、おやぢ、
さらば、拔作、惡魔の奴め。

〔註。中世の寓意劇‘Morality Plays’や「間の狂言」‘Interludes’に出て來る惡魔（Devil）は極つてヴァイス（Vice）と稱へる小鬼を從へてゐる。このヴァイスの役目は惡魔の手傳をすると共に屢〻惡魔を揶揄ことであり、木刀をふるつて惡魔の爪を切らうとしたり、惡魔が何か言ふと、反りくり返つて「ア、ハ！」とか「オ、ホー！」とか、對手を莫迦にしたやうな應答をするのが常である。〕

第三場　オリヴィアの庭園。

セバスティアン登場。

セバスティアン　これは空氣だ。あれは輝やかしいお天道さまだ。この眞珠をあの方が下さつた、己はそれを觸つてゐる、見てもゐる。又、斯うして己を纏んでゐるものは驚きではあるが、狂氣ではない。それぢやアントニオは何處にゐるのだ？「エレファント」では見つけることが出來なかつた。でも、あすこにゐたのだ。それに、どうやら己を搜してこの市を歩き廻つてゐられるといふことが分つた。今の場合あの人の意見が聞けるとこの上もなく都合がいいのだがなあ。といふのは、己の心は己の分別と爭つて、これは何かの間違ではあるかも知れないが、狂氣の沙汰ではない、といふことを巧に論じ合

ふのだが、而も、この不意の出來事と幸運の氾濫は全く例外でもあり、論外でもあるので、われとわが眼を疑ひたくなり、己が氣狂か、さもなければお姫さまが氣狂だといふ以外のどんなことを信じさせようとして說得して見ても理性の言ふことを聽くまいとする。が、若しさうなら、あの方は館を治めたり、從者を使つたり、世帶萬端を、現在まのあたりに見たやうに、ああまで圓滑に、愼重に、又、落着いてとりさばくことは出來ない筈だ。こりや何かあやしいことがあるのだ。でも、そこへお姫さまが見えた。

オリヴィアと僧侶登場。

オリヴィア　私のこの性急を咎めて下さいますな。仰有つたことに間違がないなら、たつた今、私と、又このお僧さんと一緒にすぐ側の禮拜堂へいらして

下さいまし。そこで、この方の前で、又、あの聖別せられた屋根の下で、あなたに心變がないといふことの十分な確證を誓つていただき、私の、このいかにもやかましく疑ひぶかい心が安心して生きて行かれるやうにしていただきます。この方にはあなたが世の中に知らせてもいいとお考へになる時まで隱していただきます、その上で、私の身分に適はしいお祝を致したいと思ひます。御異存はありませんか。

セバスティアン　御上人さまのお供をして御一緒に參りませう。一旦、誓を立てましたら、いつまでもそれを守ります。

オリヴィア　では、神父さま、御案內下さいまし、天も輝やいて私のこの行を御照覽下さいますやうに。

〔退場。

第五幕

第一場　オリヴィアの館の前の街。

道化とフェイビアン登場。

フェイビアン　はて、己とお前の仲だ、その手紙を見せろ。

道化　ねえ、フェイビアンさん、もう一つお願をかなへて下さいな。

フェイビアン　何でも聽くよ。

道化　この手紙を見ようと思はないで下さい。

フェイビアン　こりや犬をあげる、その代りに私の犬を下さいといふやつだ。

〔註。この喜劇に縁の深い（解題參照）ジョンマニンガムの日記（一六〇三年三月二十六日）に、女王の身内の人でドクタァ、ブレンといふものが、犬を秘藏してゐるといふことを聞かれて、ある日、女王はそのブレンに、私の一つの願を聽いてくれないか、その代りにどんな願でも聽きとどけようと言はれた。さて、その願はそなたの犬だ、よろしうございます、と言つた上で、ブレンは、私のお願は私の犬でございます、と申上げた、といふことが記されてゐる。フランシス・カールから聞いたといふことになつてゐるが、恐らくこの喜劇の觀客にはすぐにそれと分るやうな宮中の一つ話であつたと思はれる。〕

公爵、ヴァイオラ、キューリオ、及び從者たち登場。

公爵　これこれ、お前たちはレイディ、オリヴィアの館の者か。

道化　さやうで。私どもはその飾りの一部なんで。

公爵　お前には見覺えがある。どうだ、機嫌はいいか。

道化　上機嫌で、はい、敵のおかげで益〻よくなり、味方のおかげで愈〻悪くなつてゐます。

公爵　正反對だ、味方のおかげで益〻よくなつてゐるのだ。

道化　どう致しまして、愈〻悪くなつてゐます。

公爵　そりや又どうしたわけだ？

道化　かやうでございます。味方の奴は私を賞めそやして莫迦に致します。ところが敵となると、あからさまに莫迦だと申します。で以て、私は敵のおかげで私といふ者についての知識を得、味方のおかげで欺しうちにせられます。で、結論は接吻のやうなものでございますから、四つの否定が二つの肯定を成すわけで、その時はそれ、味方のおかげで益〻悪くなり、敵のおかげで愈〻よくなります。

〔註。接吻は、上、下、彼、我、反對の四つの唇（否定）が二つの熱烈な唇（肯定）に依つて一つ

となることである。若し結論が接吻であるとすると、私は莫迦でないといふ否定の結論は、私は莫迦であるといふ肯定の結論の半分の價値しかない。否定と肯定の價値の比率は四對二、即ち二對一であり、否定は肯定の倍だけの價値をもつてゐるから、肯定は否定の半分の價値しかもつてゐないのである。（ドウヴウ・ウィルスン。）〕

公爵　なるほど、こりや上出來だ。

道化　どう致しまして、さうぢやございません。御前さまは味方の一人になつて下さるおつもりでせうけれど。

公爵　己のおかげで愈〻悪くなつてくれてもなるまい。さあ、金貨だ。

道化　二重取引にならないなら、もう一つこしらへていただきたうございます。

公爵　おや、よくない入れ智慧をするな。

道化　まあ、今度だけは御前さまのその貴いお氣もちをポケットにおしまひになつて、血と肉〔註。人情。〕の命ずるところに從つていただきます。

公爵　ぢやあ、二重取引をするところまで罪人になるか。それ、もう一つだ。

道化　一、二、三つ、〔註。子供の遊戯。〕てのはおもしろい遊です。古い諺にも三番目がみんなの支拂をすると申します。三つ、見る見る跳んで來る、と申しましてな。さもなければ、セント・ベネットの鐘でございます、思ひ出して下さいましよ、一つ、二つ、三つ。

公爵　その手で己のふところから金を振り出すことは出來ないよ。お姫さまのところへ行つて、お話ししたいことがあるのでここへ來てゐると申し上げ、お連れ申して來たら、まだもつと褒美をとらせる心もちが目をさますかも知れぬ。

道化　それでは、歸りますまで、御褒美はねんねに致しませう。參りますよ。でも、私のこの有つといふ慾が貪慾の罪であるといふのはもつての外と思召していただきます。が、仰せの通り、御褒美はおやすみ、今にお目覺をさせ

てさしあげます。

ヴァイオラ　そこへ私を救つて下さつた方が來られます。

アントニオと警吏登場。

公爵　その男の顔には十分見覺がある。が、この前に見た時には戰の硝煙に塗れてヴァルカン〔註。ギリシアの銀治の神。〕のやうに黑くなつてゐた。吃水の淺い容積の貧弱な、小つぽけな船の船長であつた。あの男はわが艦隊の中でも堂堂たる軍船と激烈な格闘を演じ、こちらは嫉視と損害を忘れて賞めそやした位であつた。こりや何事だ？

第一の警吏　オーシーノウさま、こやつがフィーニックス號とそのキャンディー〔註。クリート島の港。〕からの積荷を奪つた、あのアントニオでございます。

十二・夜

甥御さまのタイタスどのが一脚を失はれた時、あのタイガァ號に乘込んだ男でございます。ここの街中で、身の恥も世間の治安も一切構はず、私闘をやつてゐましたので、逮捕致しました。

ヴァイオラ　御前、私には親切にして下さいました、味方になつて劍を抜いて下さいました。が、最後になつて私に奇體な言葉を浴せかけました。氣が觸れたといふより外には何と考へていいか分りません。

公爵　名立たる海賊！　潮路を荒す盜賊！　一體どうしたのだ。不倶戴天もただならぬこの手合の手中に陷るとは、ずゐぶん間抜けた剛膽ぶりではないか。

アントニオ　オーシーノウ殿、御免を蒙り、お授け下さいました汚名を拂ひ退けさせていただきます。アントニオはまだ盜賊や海賊であつたことはございません。尤も、オーシーノウの敵であることは、十分な根據に基いて白狀致

します。こちらへ參りましたのはちよつとした魔がさしたのです。お側にゐるそのひどい恩知らずの小僧を私は荒海の狂瀾怒濤の顎から救つてやりました。とても望のない殘骸だつたのです。私は命を與へ、その上に愛を添へてやりました、惜しみなく、構ひなく、一切を捧げたのです。全くそやつのこと思ふをあまり、この敵方の市に踏み込むといふやうな危險をも冒したのです。攻撃せられた時には擁護の劍をも拔いたのです。ところが、そこで逮捕せられると、そやつ手の裏を返したやうな狡猾な量見から、私と危險を共にしようともせず、見ず知らずの他人だと、そしらぬ顏をして、一瞬の間に二十年も逢つたことのないやうな者になり、半時間も經たない前に、使つてくれと言つて渡しておいた、私の財布を返さないのです。

ヴァイオラ　これはどうしたことでせう？

公爵　何時その男はこの市に來たのか。

アントニオ　今日のことです。その前、三個月の間は、絶えず、一刻も離れず、晝夜を共にしてゐたのです。

オリヴィアと從者たち登場。

公爵　伯爵の姫宮がお見えになつた。雲の通ひ路吹きとぢよ、だ。お前のことだがね、お前の言つてることは狂氣の沙汰だよ。三個月の間この青年は私に仕へてゐた。が、このことは後に言ふ、こやつを連れて行け。

オリヴィア　このオリヴィアがお役に立つやうなもので、あなたさまにさしあげられないものを除き、何を御意遊ばします。シザリオさん、約束を守つて下さいませんでしたね。

ヴァイオラ　マダム！

公爵　美しいオリヴィアどの、——

オリヴィア　何ですか、シザリオさん。お殿さま、御免を——

ヴァイオラ　御主人がお話をなさいます。私は何も申し上げられません。

オリヴィア　古い調に合はたことを仰有るのでしたら、それは私の耳には音樂のあとの亂聲のやうに、もう倦き倦したものでございます。

公爵　いつまでもそんなに酷いことを仰有るのですか。

オリヴィア　いつまでもこんなに心を變へないのでございます。

公爵　强情になつても、と仰有るのですか。情知らずのお姫さま、その不人情な、無慈悲な祭壇に私の心は、かつて戀慕の情が捧げたものの中、この上もない忠信な祈願を唱へたのだ！　一體私はどうすればいいのです。

オリヴィア　御身分に適はしいやう、どうなりと御隨意に。

オーシーノウ　やりおふせるだけの勇氣があつたなら、まさに死なんとするエジ

プトの盗賊のやうに、愛する者を殺しかねないものでもない。〔註。一五六九年、トマス・アンダダウントに依つて英譯せられたヘリオドラスの『エティオピア物語』の中に「シアジニースとキリクレア」と題する小品がある。シェイクスピアは多分それに言及したのであらうと考へられてゐる。〕野蠻な嫉妬にも時には高貴に感ぜられるものがあるのだ。が、次のことをお聽きなさい。あなたの侮蔑が私の眞心をうち棄てたのであるから、又、あなたの愛情に於ける私のほんたうの地位を拔きとつた道具は略分つてゐるのであるから、あなたはいつまでも大理石の胸をもつた暴君としてお過しになるがよろしい。但し、この御寵愛の小僧、こやつを愛してゐられることは分つてゐます。又、こやつを、天も照覽、私はずゐぶんいたはつてやつたのですが、こやつが主人の憎みを冠にして坐り込んでゐる、あなたのその無慈悲な眼から搦ぎとるつもりです。小僧、伴いて來い。己の心は殘虐に滿ちてゐる。愛する小羊を生贄にしてやる、鳩の外貌の中にある鴉の心に

思ひ知らせるためだ。

ヴァイオラ　私は又、御心をやすめまつるためとあらば、心から喜び勇んで千度の死にもつくつもり。

オリヴィア　シザリオさんは何處へいらつしやいますか。

ヴァイオラ　この眼よりも、わが命よりも、何ものよりも立ちまさり、これから先、よしんば妻を愛するやうなことがあるにせよ、それ以上にお慕ひする御方のあとを遂うて參ります。これがいつはりであるなら、天の證人たちよ、わが愛を汚したことに對して命をも召したまへ。

オリヴィア　ああ、誓言で嫌はれた。何といふ欺されやうであらう！

ヴァイオラ　誰があなたを欺しました？　誰があなたに不屆なことを致しました？

オリヴィア　あなたは御自身をお忘れになつたのですか。あれはそんなに長い

前のことでせうか。神父さんを呼んでおいで。

公爵　さあ、來い！

オリヴィア　何處へお連れになります？　シザリオ、夫、お待ちなさい。

公爵　夫だと！

オリヴィア　はい、夫です、その方にさうでないと言へますか。

公爵　この人の夫か、やい！

ヴァイオラ　いえ、そんなことはございません。

オリヴィア　まあ、情ないことを！　御自身が御自身でないと仰有るのはあなたの恐怖がさせる卑怯な行です。恐からなくてもいいのよ、シザリオ、幸運をお引受けなさい。あなたに自分の身の上が分りさへすれば、あなたが恐がつてゐる人と同じやうに偉くなれるのだから。

僧侶登場。

よく來て下さいました、神父さん。神父さんお願ひでございます、つい先程は內證にしておいていただくつもりでしたけれど、この青年と私との間に新にとりかはされたことについて御存知のことを、今の事情がその時をまたずして現はすことを、御自身ここでうちあけていただきたうございます。

僧侶　とこしへに變らぬ愛の誓約です、互にとり合ふ手と手に依つてかためられ、聖淨な唇の結ばれることに依つて證せられ、指輪をとりかはすことに依つて强められました。而も、この約束の儀式一切は私の職掌に依り、私が證人となつて確認したものでございます。その時以來、時計の示すところに依りますと、私の墓に向つて歩くこと、僅かに二時。

公爵　ああ、しらばつくれた犬ころめ！　毛皮に白髮を撒かれる頃にもなれば

どんな者になりをるか。それとも、狡猾な才能がぐんぐん生長してこましやくれた立廻りのあげくの果にひつくり返ることにでもなるか。おさらばだ、女を受取るがいい。が、お前と己が向後決して會はないやうな處へ足を向けろ。

ヴァイオラ　殿さま、斷じて——

オリヴィア　ああ、誓言はなさいますな。少しは名譽をとつてお置きなさいまし、恐怖の方が少し過ぎますよ。

サア、アンドルー・エイギュチーク登場。

サア、アンドルー　後生だ、外科醫を呼んでくれ。一人サアトウビーのところへも遣つてくれ。

オリヴィア　どうせられました？

サア、アンドルー　彼奴、己の腦天をぶち破りをつた、サア、トウビーにも血塗れの雞冠を附けやがつた。後生だ、助けて下さい！　やれやれ、四十バウンド使つても家にゐた方がよかつたなあ。

オリヴィア　誰がそんなことをしたのですか、サア、アンドルー。

サア、アンドルー　伯爵（註。サア、アンドルーの間違。）の侍士で、シザリオといふ奴だ。臆病者だと思つてゐたのだが、まるで惡魔の化身のやうな奴さ。

公爵　私の侍士、シザリオだつて？

サア、アンドルー　こりや驚いた！　ここにゐらあな。貴公はわけもないのに吾輩の腦天をぶち破り召された。こちらの致したことはサア、トウビーに嗾されて致したのだ。

ヴァイオラ　どうして私に喰つてかかるのです。あなたに傷をつけたことなど

はありませんよ。あなたこそ理由もないのに劍を拔いてかかられた。が、私はおだやかにお話をつけて傷なんか負はせませんでした。

サア、アンドルー　血塗れの雞冠が傷なら傷を負はせたのだ。おほかた貴公は血塗れの雞冠なんか物の數とも思はないのであらう。

サア、トウビー・ベルチと道化登場。

それへ、サア、トウビー・ベルチが跛足を引きながらやつて來た。なほこの上のことをお聞きになりませう。あの男が酒を飲んでゐなかつたならば、あれとは違つたあんばい式に貴公をつつ突いたのだが。

公爵　これこれ、侍士！　御容態は如何です？

サア、トウビー　どうも斯うもありやあしねえ！　傷を受けたんだ、それでお終へよ。拔作、外科醫のディックに逢つたかい、おい、拔作。

道化　ああ、あれはサア、トウビー、一時間も前に醉拂つてゐますよ、あいつの眼と來ちや朝の八時から睡つてゐるんでねえ。

サア、トウビー　ぢやあ、あいつは惡黨だ、八字の皺を寄せてぐうたら踊をする奴だ。己や飲だくれの惡黨は大嫌えだ。

オリヴィア　この人をあちらへ連れておいで。誰がこんなに散散な目に遭はせたのだい？

サア、アンドルー　己が介抱してやらうよ、なあ、サア、トウビー、お互に繃帶し合ふのだから。

サア、トウビー　貴樣が介抱する？　頓痴氣で、氣障な奴で、惡黨で、うすつぺらな馬面の惡黨で、しかも、うすのろと來てら！

オリヴィア　寢床へ入れてね、傷の手當をしておやり。

セバスティアン登場。

セバスティアン　マダム、御身内の方にお怪我をさせたのは遺憾に思ひます。が、たとひ、對手が血を分けた兄弟であつても、身の安全を思ふだけの分別があれば、あれ位のことはどうしてもしなければならなかつたのです。御不興のまなざしを投げかけられるところを見ますと、御機嫌をそこねたといふことは分ります。許して下さい、ねえ、戀人、先ほど、とりかはしたあの誓に免じて。

公爵　一つの顔、一つの聲、一つの着物で、しかも二人の人間、自然の作つた實體鏡、在つて在らずとはこのことだ。

セバスティアン　おなつかしいアントニオ！　お別れしてからの時刻がどんなにもどかしく焦立しく思はれたことでせう。

アントニオ　セバスティアンですか、あなたは。

セバスティアン　それに御懸念があるのですか、アントニオ。

アントニオ　どうして又あなたは御自身を二つに分けられたのです？　二つに切られた林檎でもこの二人の人間のやうに双生兒ではない。一體どちらがセバスティアンです？

オリヴィア　ほんとに不思議だこと！

セバスティアン　そこに立つてゐるのは私ですか。私には弟なんてものがなかつた。ここにゐるかと思へば、あらゆる處にゐるといふやうな神の性も私のもつて生れた性質の中にはあり得ない。妹はありましたが、その妹を見さかひのない波と巨浪が呑んでしまつたのです。どうか聞かせて下さい、あなたと私とはどういふ縁の筋に當るのですか。何といふ國の方です？　お名前は何と仰有います？　親御は？

ヴァイオラ　メッサリーンの者、父の名をセバスティアンと申しました。兄も亦セバスティアンで、あなたにそつくり、ちやうど、さういふ衣裝をつけて水の墓に沈み果てました。靈魂が姿と衣裝を裝ふものであるとすれば、あなたは私どもを脅さうとして來られたのです。

セバスティアン　いかにも私は靈魂です、が、母の胎から受けついだあの姿の中にあさましくもつつまれてゐます。あなたが女なら、他のことには條理が立つてゐるのだから、私はあなたの頰の上に涙を流し、『水に溺れたヴァイオラよ、よう歸つてくれた』と言ふべきところです。

ヴァイオラ　私の父は額に黑子がありました。

セバスティアン　私の父もさうだつた。

ヴァイオラ　して、ヴァイオラが生れてから十三年を數へた年になくなりました。

セバスティアン　ああ！　その記憶は心の中にまざまざと記されてゐる。いかにも父は妹が十三歳になつたその日に人の世の仕事を終られた。

ヴァイオラ　男から奪つた私のこの衣裝以外には二人を幸福にすることを妨げるものがないといふことであれば、處と時と運命の一つ一つの事情がぴつたりと合つて、ヴァイオラであると極まるまでは私を抱かないで下さい、その判斷を確めるために、私の娘の衣裝が置いてある、この市の、とある船長のところへお伴れ致します。その方の御親切なお力添で私は命をとりとめ、この伯爵さまにお仕へすることになりました。それ以來、私の身にふりかかつたすべてのことはこのお姫さまとこの殿さまの間のことなのです。

セバスティアン〔オリヴィアに〕　かうなると、お姫さま、あなたは誤解せられたことになるのですが、それも自然が當然さうあるべき道をとつたからです。あなたは生娘に婚約せられるところでした。と申しても、私の命に誓つて、

欺されたわけではありません。あなたは生娘と男と兩方に縁を結ばれたのです。

公爵　途方に暮れなくてもよろしい。血統はまことに立派な男です。これがさうだとすると、鏡はどうやら本物らしいから、私もこの極めて幸福な難破の中に與るとしよう。〔ヴァイオラに〕これ、少年、お前は幾度とも知れずこの己を愛するやうには女を愛しないと言つたな。

ヴァイオラ　申し上げました言葉のすべてには、重ねて誓言致します、またその誓言を星宿〔註。太陽のある星宿。〕が晝夜火を絶たぬやうに變ることなく心に守るつもり。

公爵　手を貸せ。して、お前の女の衣裝をつけた姿を見せてくれ。

ヴァイオラ　はじめ岸邊に連れて來てくれました船長が私の娘の衣裝をもつてゐます。その人は或訴訟のかどに依り、侍士で、お姫さまのお館に仕へてゐ

られるマルヴォリオに訴へられて入獄してゐます。

オリヴィア　その者に釋放させます。ここへマルヴォリオを伴れておいで。でも、ああ、それで思ひ出した、あの人は、可哀想に氣が狂つてゐるといふことだつた。すつかり心を奪ふ自らの狂亂に何もかもうち忘れて、あの人の狂亂にはとんと氣がつかなかつた。

手紙をもつた道化、フェイビアンと共に登場。

これ、あの人はどうなの？

道化　いやはや、マダム、ああなつた男の力に及ぶ限り、ビエルゼバップ〔註。惡魔。〕を近寄らせまいと、必死の努力をやつてゐますよ。あなたさまに宛てて、これ、この手紙を書きました。今朝お渡しする筈でしたが氣狂の書簡は

福音書ではございませんから何時お渡ししたところで大した相違はございません。

オリヴィア　封を解いて、讀んでごらん。

道化　では、阿呆が氣狂の意を傳へますから、とくと御心をとめてお聽き下さい。

〔讀む〕「神明に誓つて申す、マダム、」――

オリヴィア　これこれ、お前さんも氣が狂つたのかい。

道化　いえ、マダム、私は氣狂を讀んでゐるだけなんで。あなたさまが本式に讀んでくれと仰有るのであれば聲容さながらに聽いていただかなければなりません。

オリヴィア　とにかく正氣でお讀み。

道化　やつてゐますよ、マドンナ。しかしあの男の正氣を讀むとなると、かういふ風に讀むことになります。かかるが故に、考慮召されて、わが姫君、御耳を傾けたまへと云爾。

オリヴィア　〔フェイビアンに〕お前さん、讀んでおくれ。

フェイビアン　「神明に誓つて申す、マダム、お仕打は無法なり、世間にこの由公表致すべし。小生を暗闇の中に投じ、泥醉せる御身内の者に監督せしめられたりと雖、猶小生は貴女と同樣に正しき感官の惠を受くるものなり。小生をあのやうに裝はしめし貴女の御玉章は今に所持罷在り。それを用ゐなば、自身には大いに非を正しくし、貴女には甚しき恥辱ともなるべし。小生を如何やうにとも思召し給へ。聊か本分を顧みず、侮辱を恨むに依つて斯くは申し上ぐる者也。

オリヴィア　あの人がこれを書いたのかい。

亂行を蒙れるマルヴォリオ。」

道化　さやうで、マダム。

公爵　これぢや大して氣狂のやうにも感ぜられない。

オリヴィア　フェイビアン、お前、牢から出るやうにしておやり、ここへ伴れておいで。

〔フェイビアン退場。

殿さま、これらの事情をなほとくとお考へになりました上で、どうか私を人妻であると共に妹と思召し、吉日を選びまして結婚のお祝をすることに致しては如何でございませう、この私の館で、私が萬事をととのへまして。

公爵　マダム、御申し出では快んで承ります。〔ヴァイオラに〕そなたの主人は暇をとらせるぞ。そなたの女としてもつて生れた本性とはまことにかけ離れた、そなたのやさしく、おだやかな生ひ立ちにはまことに適はしからぬ奉公をつとめおふせたことに對し、又一つには、これ程長く主人と呼んでくれたことでもあるから、さあ、この手がそなたを迎へる。向後は主人の戀人になつてくれるのだ。

オリヴィア　妹！　あなたは妹なのよ。

フェイビアン、マルヴォリオと共に登場。

公爵　これがその氣狂ですか。

オリヴィア　さうなのですよ、この人なのです。どうしたの、マルヴォリオ？

マルヴォリオ　マダム、ひどい目に遭はせましたな、とつてもひどい目に。

オリヴィア　私がかい、マルヴォリオ？　いいえ。

マルヴォリオ　お姫さま、あなたがなすつたのです。その手紙をよくお讀み下さいまし。今となつてあなたの御手でないとは申されますまい。お出來になるなら、手跡なり、文句なり、それとは違つたものを書いてごらんなさい、そ

れとも、これはあなたの封印ではなく、あなたの綴つたものでもないと仰有つて下さい。あなたにはこの一つをも仰有ることがお出來にならない。で、さうだとすれば、あなたの手紙であることを認めて下さい、その上で誠實の品位を失はずに仰有つていただきませう、そもそも何故に御寵愛のさういふ明白な表示を與へられたのですか、やれ、黄色い靴下を穿けの、やれ、サァ、トウビーその他の輕薄な輩を蔑視しろの、と。而も、從順な希望をもつてその通りに致しました時には、又、何故に私を牢屋へ投げ入れ、暗室に閉ぢ込め、僧侶に訪問させ、計謀でひどい目に遭つた者の中にもかつて例のないやうなうつけものにせられたのですか。その理由を承りませう。

オリヴィア　まあ、氣の毒な！　マルヴォリオ、これは私の書いたものではないよ、尤も、私の手によく似てゐることは認めるけれど。が、これはきつとマライアの手なのよ。今思ひ出すと最初お前が氣狂だと言つたのはあれだつ

た。すると、お前がにたにた笑ひながら、ここに、この手紙の中に言つていた通りの姿でやつて來た。まあまあ、勘忍しておくれ。このいたづらはお前をずゐぶんひどい目に遭はせた。が、その理由と作者が分つた時にはお前が事件の被告でもあり、裁判官でもあるやうにしてあげるから。

フェイビアン　マダム、私の申し上げることをお聽き下さいまして、先刻來、感にたへて見て居りましたこの現在のありさまを、これから後の喧嘩口論に依つて損はれるやうなことにはしたくないと存じます。さうならないやうにとの希望から、うちあけたところを白狀致しますと、私とサァ、トウビーがここにゐるマルヴォリオに對して、この男の多少强情で、又、無禮な仕業が癪にさはつたといふやうなわけで、かういふ惡ふざけを仕組んだのでございます。サァ、トウビーが大層責め立てましたので、マライアが一筆揮ひ、その報酬として二人は結婚致しました。ついで行はれました惡ふざけ、その次第、敵、

味方双方が蒙りました痛手を正當に考へ合はせますと、復讐の何のと申すよりも、寧ろ大笑になりませう。

オリヴィア　可哀想に、この愚か者をようもまあ散散な目に遭はせたのねえ。

道化　いやはや、『或者は生れながらにして偉大なり、或者は偉大を達成し、又或者は偉大を投げ與へらる』か。私もねえ、あなたに、この狂言の中で、一役つとめましたよ。ねえ、あなた、サァ、トウバスといふのですよ。が、そんなこたどうでもいいや。『神明に誓つていふが、ねえ、阿呆、己は氣狂ではないんだよ』つてね。でも、覺えてゐられますか。『マダム、何故かやうな能なし猿を笑つておやりになるのです。あなたさまが笑つておやりになるのでなければ、この男、うんともすんとも言ふことが出來ないのです。』斯うしてめぐる時の打ち獨樂、因果應報、依つて件の如し。

マルヴォリオ　どいつも、こいつも、思ひ知らせてくれるぞ。

〔退場。

オリヴィア　あの人はほんたうにひどい目に遭つたのだわ。

公爵　あとを遂つて、何とかなだめて仲直りをさせるがよい。まだ船長のことを言つてくれなかつた。それが分り、吉瑞の時が適つたら、われわれの大切な心の嚴かな結合を祝ふことにしよう。それまでは、妹よ、われわれもこことを立ち去らないことに致します。さあ、來な、シザリオ、男である間はさういふことにしておかなければならぬ。今一つの衣裝を着て現はれた時には、オーシーノウの想ひびと、その戀の女王だ。

道化〔歌ふ〕

わしが小びつちよの小僧の時に、
　よいやよいやさで、雨と風。
莫迦なことでも事なく通る、
　雨は毎日降りつづけ。

〔道化の外、一同退場。

十　二　夜

それが大人の身となる時は、
　よいやよいやさで、雨と風。
悪黨と盜人は締出し食つた、
　雨は毎日降りつづけ。

それが、やれやれ、嫁とる時は
　よいやよいやさで、雨と風。
威張るばかりぢや役にも立たず、
　雨は毎日降りつづけ。

それが寢床へしけ込む時は
　よいやよいやさで、雨と風。
醉つた同志が醉ひつぶされた、

雨は毎日降りつづけ。

世界闘けてよほどになるが、
　よいやよいやさで、雨と風。
ひとつことだよ、芝居は濟んだ、
　これで、毎日大車輪。

〔完〕

14347

シエイクスピア選集
十二夜
定價百二十圓

昭和廿三年六月二十日印刷
昭和廿三年六月二十五日發行

譯者　竹友藻風
發行者　秦邦夫
印刷者　井下精一郎　大阪市西淀川區柏里町三ノ一二九
印刷所　壽印刷株式會社
發行所　株式會社　大阪文庫　東京都千代田區有樂町二ノ四（護經ビル）内　大阪市北區曾根崎新地二丁目一九

932
SH 12
4

終